

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	災害復興制度研究所
大項目	11 教員・教員組織
中項目	
小項目	11.0.2 学部・研究科等の教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。
要素	編制方針に沿った教員組織の整備 授業科目と担当教員の適合性を判断する仕組みの整備 研究科担当教員の資格の明確化と適正配置(院・専院)
小項目	11.0.3 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。
要素	教員の募集・採用・昇格等に関する規程および手続きの明確化 規程等に従った適切な教員人事
小項目	11.0.4 教員の資質の向上を図るための方策を講じているか。
要素	教員の教育研究活動等の評価の実施 ファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施状況と有効性

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 教育拠点形成に向けて「災害復興学」を継続的に開講するため、その教員組織や運営体制を整備する。	→「災害復興学」の継続開講年度数、担当学部数、担当教員数、履修者数。	B	B	B	B	B
2. 国際的拠点形成に向けて、国際教育・協力センターとの協力関係を構築する。	→国際教育・協力センターとの連携による研究者・学生の交流実績。	C	C	C	C	C

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
3. 高麗大学校日本研究センター(韓国)との共同研究を実施する。 (2012年度設定)	→交流実績、刊行物の数。				B	B
4. 福島大学開講の「ふくしま復興学」への協力を行う。 (2012年度設定)	→講師の派遣数。				B	B

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 基盤・学際科目「災害復興学入門」「災害復興学」「減災まちづくり」を継続して開講している。「復興学」は一分野の学問にとどまらない学際科目であるため、多分野の専門家からその講師を招聘している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 関連科目を継続して開講しており、近年では履修者数制限を設けているほど学生の「災害復興学」への関心は増大している。なお、学生の世代進行(阪神・淡路大震災を経験しない世代の入学)に伴い、授業内容を再検討していく。講義はオムニバス形式で構成され、山中主任研究員、松田研究員、室崎前所長のほか、社会学部・総合政策学部教員の他、他分野の専門家が非常勤講師として担当している。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 本年が阪神淡路大震災から20年を迎えるにあたり、まずは当時の状況を踏まえた講義内容を展開していく。また、学内にとどまらず、東北学院大学との連携協定に基づき同大学への配信するだけでなく、出来れば社会人へ授業配信をおこない、広範囲の人びとに対して講義を発信する。また、「復興学」を確立するため、本講義を基礎に教科書の策定・出版を行う。	☆
		その他	☆

目標2	C	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究員個々の研究においては海外での研究を実施しているが、CIECとの連携は未達成である、国際的な連携としては、2012年度に高麗大学校日本研究センターと「東日本大震災と日本」をテーマに研究交流を行った。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か CIECとの連携による研究者・学生の交流は実績はないため、今後、国際的拠点へ向けていく手段については改めて検討する必要がある。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 現在、CIECなどが中心になって実施しているグローバル化のための種々のプログラムの進捗状況を考慮しながら、両組織の責任者間で、可能なプログラムや行事等について、協議を開始する必要がある。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度より高麗大学日本研究センターグループと共に「東日本大震災と日本」をテーマに研究交流を開始、9月には本研究所と同大日本研究センターと共催で国際学術大会「東日本大震災と日本-災害から見た日本社会と韓国への投影-」を高麗大学にて開催した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 高麗大学での研究会には、本研究所より3名の研究員が参加し研究発表および討議に参加した。この交流の成果は「東日本大震災と日本-韓国から見た3・11」として刊行された。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2014年1月に連携協定を締結した東北学院大学においても高麗大学校との共同研究を行っていることを睨み、三者間で共同研究等を行うことも一つの方法だと考える。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標4	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 福島大学開講「ふくしま復興学」に室崎所長・山中主任研究員を派遣した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 福島大学災害復興研究所との連携については、2012年10月の日本災害復興学会においてその一定の成果を発表した。この連携は授業の他、定期的に研究会も開催していたが、現在ではこの研究会活動は原発避難白書・地域周辺問題研究会・低線量被曝問題研究会というかたちで引き継がれている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新たに、2014年1月に東北学院大学地域共生推進機構との連携協定を締結、東日本大震災からの復興に寄与する研究・教育に協力して取り組むことになった。今後、本学の講義をインターネット配信するほか、災害を経験した両大学が持つノウハウを共有し今後の防災・減災の取り組みなどに関し協力して教育・研究活動を行いたい。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆